

### 物語教材において、「活用型」の学習を考える — 単元の中での「活用」 —

大阪府大阪市立北中道小学校長 田窪 豊

#### 一 はじめに

「国語科の指導は難しい。」とよく言われる。その原因の一つに、系統的に指導することの難しさがあげられる。

しかし、今話題になっている「活用型」の学習に取り組むことで、難しいと言われていた系統的な指導の手がかりを得ることができると考えられる。一つの実践をもとに「活用型」の学習に取り組むためのポイントを述べていきたい。そこで、まず、大阪市立南田辺小学校の岡崎夕貴教諭の実践を紹介する。

#### 二 学習活動の実際

学習の大きな流れは次のとおりである。

- 第一次 「片耳の大シカ」の紹介文（指導者が作成）を読んで学習の見通しをもつ。
- 第二次 「大造じいさんとガン」を読み取りながら、最後に紹介文を書く。
- 第三次 椋鳩十の他の作品を読み、紹介文を書く。

次に第一次で指導者が作成した紹介文を示す。

<p>「片耳の大シカ」は椋鳩十の作品です。この作品は、作家である主人公の「わたし」の経験をもとに書かれています。わたしは、りょう師とともに、シカをしとめるために山に入ります。片耳の大シカはシカの大しやうでとてもかしいシカです。人間のやりくちを覚えていて、仲間をつれて逃げてしまうので、りょう師たちは、片耳の大シカをしとめたいと思っています。</p> <p>わたしは、片耳の大シカをしとめようと、山を追いかけますが、最後には目の前にいる片耳の大シカをうたずに行かせます。それは、片耳の大シカの群れに命を助けられたからでした。わたしは、命をうばおうとしていたのに、片耳の大シカたちは、同じ動物として風が過ぎるまであたたかくくれました。</p> <p>動物はとも平等です。不必要に殺したりはしないのだと思います。椋鳩十はこの作品で、そんな動物の生き方の美しさを伝えているように思います。</p>	<p>作品名と作家名 場面設定 大シカの説明 わたしの気持ちの変化とその理由</p>
<p>主題</p>	

この紹介文の特徴は、児童に書かせる文字数（四〇〇字）に合わせていること、紹介文に盛り込ませたい項目を下段に明記していることである。授業者は、「主要人物の心情が変容する契機となった出来事」「主要人物の心情が変容した理由」「作品の主題」を、物語を読み観点と考へ、それらの観点で紹介文を書く、そのためにそれらの観点で読み取る

という二つのねらいをもったのである。この二つが単元を通じての大きなねらいである。

さらに、この紹介文は学習課題の設定にもつながった。人物の心情の変容とその契機となった出来事との関連を読み取ることを意識させたのである。そのため、学習課題は、「『ううむ』と思わず感嘆の声をもらしたのはなぜかを読み取るう』というように人物がなぜそのような行動をしたのかその理由を探るものになっていった。

第二次では、課題解決の手がかりになる言葉や文、文章から人物の心情を読み取ったり、さらに、作者の意図に迫ったりすることができた。

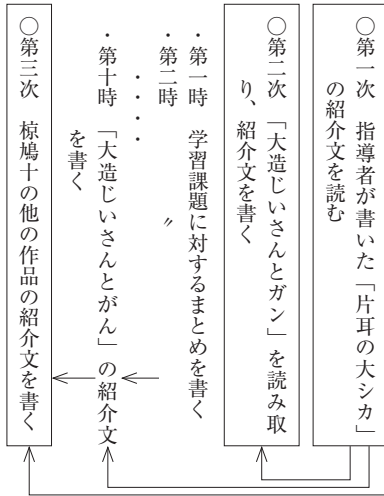
しっかりとした音読、小集団や全体での活発な意見交流、交流後におけるノートの書き加えなどによって課題が解決されていった。第二次の最後には「大造じいさんとガン」の紹介文を書き終えることができた。ここでは、第一次の紹介文を振り返り、先の三つの観点を盛り込んだものにまとめることができた。第三次では、主体的に読書に取り組んだ。

付箋やノートを活用しながらそれらをものに紹介文をまとめることができた。

今まで表面的な読み取りしかできなかった児童も、物語の展開に着目しながら読むことができた。展開が自分の予想と異なってきたかを書くことで作者の意図にまで迫ろうとした紹介文もあった。

### 三 「活用型」の学習を進めるにあたって

この実践をもとに、「活用型」の学習を進める上でのポイントを考えていきたい。次のような「活用」の流れがある。



① 何を活用するのか、活用させたい「もの」や「こと」を明確に定める  
右の図に様々な「活用」がある。その中で

一番のもとになるのは、指導者の紹介文である。そこには大切な二つが含まれている。

- ・第二次での読み取りのための観点
- ・第二次、第三次で書く紹介文の観点

#### ② どのように活用させるか具体的に示す

紹介文とその下欄の盛り込ませたい項目を見ながら活用させる。

- ・項目を意識させながら学習課題を設定することに活用（どのような視点に立つのかなど）
- ・二つの紹介文を書く際に「手引き」として活用

#### ③ 活用を学習者に意識（自覚）をさせる

二つの紹介文を書くことで「活用」をより意識（自覚）させることができる。紹介文に盛り込ませたい項目を理解することが、書く活動にだけでなく、物語を読む時にも有効にはたらくことも分かる。それに、これらの項目、すなわち、「主要人物の心情が変容する契機となった出来事」「主要人物の心情が変容した理由」「作品の主題」の三つの観点が、物語を楽しく、豊かに読み進めていく観点でもあることを意識（自覚）させることで、次の物語の学習や読書生活にもつながっていくのである。

さらに、指導者はそれらの観点を増やしたり、修正を加えたり、作品に応じた観点を見つけたりするなどして「活用型」の学習を促す

展させることをめざすこともできる。

## 四 まとめ

一單元の中における、「活用型」の学習に取り組むための三つのポイントを示した。

特に留意することは、「活用する」ことを指導者がいかに意識しているかである。系統的な学習を追求する意味からも常に前述の三つのポイント意識したいものである。

また、この実践における提示された紹介文は児童が直接活用するため指導者が書かなければならない必然性をもっていた。しかし、たとえ必然性がなくても児童に書かせる中身についてはあらかじめ指導者も書くことが大切であると考えられる。吹き出しを書くにしろ、考えを書くにしろ、視点を変えて書くにしろ、すべてである。指導者が前もって書くことで、書かせるための配慮事項をつかむことができ、前回の学習や次の学習とのつながりを見つかることもできる。それはすなわち、何をどう活用させ、それを児童にどう意識（自覚）させるのか、「活用型」の学習を進める上で大切なことを導き出す手がかりを得るようになるものと確信する。

たくほ ゆたか 大阪市立北中道小学校長。国語教育探究の会員。授業がうまくなるために、今も授業力を高める研修会に意欲的に参加している。